令和５年７月１３日

日立理科クラブ通信

Ｎｏ，２０１

日立理科クラブ

「理科室のおじさん」を訪ねて２

日立市立大みか小学校

「理科室のおじさん」上野博孝さん

今回は、大みか小学校（松崎善則校長先生）の上野博孝さんです。上野さんの「理科室のおじさん」歴は、日高小学校で８年､大みか小学校で７年と通算１５年で最も長く、初期のおじさん７人のうちの一人です。

上野さんは､福岡県北九州市の出身です｡子どもの頃は、探偵小説やＳＦ小説などを読んだり、機械を分解したりすることが好きだったそうです。大学卒業後に日立製作所に入社し、エレベータ用のＤＣＭの設計を担当し、水戸工場と一緒に当時日本最速のエレベータの試作を担当したそうです。その後、日専校の教員として、２８年間電気関係の授業を担当し、高校生たちを指導してきました。その頃独学でベイシックや機械語というプログラムを学び、持久走大会の記録を集計するソフトを作るなど、コンピュータのプログラミングにチャレンジしたこともあるそうです。生徒の中から技能五輪に出場した方たちも多くいたとのことです。

理科室の空気泡

理科室のおじさんとして、理科の実験の準備や支援をするばかりではなく、クラブ活動の支援をしています。理科室には、前回のクラブの時間に児童が作った空気砲がたくさん並べられていました。次回のクラブでこれを使って児童が遊ぶ姿を楽しみにしているようでした。

授業の支援では、教科書の内容だけではなくプラスアルファーの知識を子どもたちに提供することに努めているそうです。そのプラスアルファーとは、理科の授業で実験をしてその結果から法則を説明することで終わるのではなく、その法則を応用した身近な現象を紹介するということです。子どもたちの「なんだそうなんだ」という表情を見るときとてもうれしい気持ちになるそうです。これは日専校時代に先輩から､「君は教科書を教えるのか、教科書で教えるのか」と言われたことがあるそうですが、今でもそれを肝に銘じているからです。

落花生の苗と上野さん

実は、日立理科クラブの授業支援を見ていていつも思うことですが、理科クラブの方々は、上野さん同様に、教科書の内容を理解しただけでわかったつもりにするのではなく、生活を通して考える力をつけようとしているように思います。上野さんのインタビューを通してそれがはっきりしたように思います。

理科室には手作りのおもちゃや教材が展示されています。まだ理科を学習しない１年生も寄ってきて、ものを触ったり、上野さんとお話をしたりして帰るそうです。子どもたちはそれらをとおして、理科への興味を一層深めているように思います。上野さんは、そのようなふれあいや授業の支援を通して子どもたちと接すると気持ちが若返り、とても楽しいとも言っていました。

上野さんから見た大みか小学校は、児童や先生方のまとまりがとてもよいそうです。上野さんを見かけると子どもたちは必ず声をかけてくれる、そんな思いやりのある学校のようです。そんな児童や先生方のためにも一生懸命に務めたいと話していました。

最後に、今日これから植えるのだという落花生を見せてくれました。家で種をまき、中庭に小さな畑を作って植えるそうです。花が咲き、実がなるのがとても楽しみです。

文責　日立理科クラブ　作間　忍　日立理科クラブ事務所　TEL/FAX　0294-24-3104